社会福祉法人ゆたか福祉会広報

2023
No.489



ゆたか福祉会キャラクター
ゆたかめくんとみらいちゃん

障害者のゆたかな未来をめざして10



「花火」　ワークセンターフレンズ星崎　山田むつ美さん、深谷聡さん、森部愛未さん、久野ひとみさん、菊地昭子さん

※紹介が13ページにあります。

CONTENTS

- 私たちの実践 リハビリテーション委員会の活動 …… P2～3
- ゆたか福祉会 新役員紹介 …… P4
- きょうされん全国大会 in 埼玉 …… P6～7

2023年10月10日 毎月1回10日発行　一部100円（法人会員・賛助会員は会費の中に購読料を含みます）

発行 / 社会福祉法人ゆたか福祉会　〒457-0852　名古屋市南区泉楽通四丁目５番地３
TEL 052-698-7356　FAX 052-698-7358　http://www.yutakahonbu.com/



愛知県ファミリー・
フレンドリー・マーク

ゆたか福祉会　検索

シリーズ

私たちの実践
リハビリテーション委員会の活動 ❸
～出来る喜び、繋がる楽しさ 自信をつけるリハビリテーション～

■理学療法士（PT）の役割

ゆたか希望の家では入浴やトイレ、着替えなど、生活するうえで行う活動＝日常生活動作をリハビリと捉え、自分の力で日常生活動作ができるように支援しています。理学療法士は利用者の身体機能や基本動作を定期的に評価することで、日常生活動作に問題がないかをみています。

身体機能の低下が見られた時に、筋力アップや歩行練習などの機能訓練をするのではなく、現時点でその人の身体機能に合った介助・支援を日常生活の動きの中に取り入れ、生活リハビリとして実施しています。

■実践報告

①Aさん

身体機能に合わせた支援を模索し自力での移動を再獲得した一例

ゆたか希望の家で生活しているAさんは膝の変形、足の筋力低下、心疾患により、車椅子での生活となりました。

自分の気持ちを職員に伝えたいという思いが強く、職員との関わりが多かったAさん。そんなAさんが車椅子生活となり、移動介助が必要になると、声を出すこともほとんどなくなり、座ったまま寝ていることが多くなりました。どうしたら以前のような活気を取り戻せるかを考えたときに、Aさんが自力で移動し、職員へ気持ちを伝えることが可能になれば活動量も増えていくのではないかと予測をたてました。

そこでリハビリの目標を「自力での移動手段を再獲得する」としました。車椅子の移動であれば、心臓への負担が少なく、膝の痛みが出ずに移動することが可能なため、車椅子操作の自立を目標に練習を始めました。

・腕の力で操作するよりも、足の力で操作する方が心臓への負担が少なかったため、足で地面を蹴るように漕いで車椅子を操作する足漕ぎの練習をしました

・クッションを入れて座面を高くすることにより、膝を曲げる角度を調整して足漕ぎをしやすくしました

・フットサポートを取り外して、足漕ぎしやすいようにしました

職員の介助を待つのではなく、自分で行きたいタイミングで移動出来るようになると活気が戻り、職員とのコミュニケーションが増えてきました。さらに、職員を探して生活棟の中を移動するなど、活動量が増えていきました。



車椅子操作を獲得し、日常生活の移動を自力で行うことで生活リハビリに繋げることが出来ました。その結果、意欲が向上し、日中の活動量が増え、車椅子生活になる以前のように職員との自発的な関わりを取り戻す事が出来ました。

＊職員の声

食堂でうつむいてじっとしていたAさんが、以前のように職員室に来て職員体制や献立、通院予定などを職員に聞く様子をみて、やはりAさんはこうでなくてはと思います。

■言語聴覚士（ST）の役割

ゆたか福祉会でのSTの活動は利用者の障害や、加齢に伴う摂食嚥下機能の低下に対しての関わりが中心です。食事中のムセ、食事量低下、食事形態の相談に対し、食事方法・食事形態・食事姿勢・食具・介助方法など様々な視点から問題の要因を探ります。そして、環境設定・支援方法を提案し、対応の具体化に取り組んでいます。

また、STは食事だけでなくコミュ

ニケーションに対してリハビリも行っています。本人が今まで培ってきたコミュニケーション能力を活かし、さらに能力を伸ばす「ハビリテーション」の観点を活かし、本人の能力に合った代償手段や支援方法を提案しています。

■実践報告

②Bさん
コミュニケーション拡大に向けたハビリテーションの取り組み

Bさんは、職員に対してジェスチャーや指差しで、言いたいことを伝えることができます。いくつかの言葉はありますが、声を出す時に体に力が入り表情がこわばり、話すことに苦手意識がある様子が見られました。また、慣れない人には伝わり難いジャスチャーであったり、決まったやりとりになってしまいがちで、本人も伝わらないと諦めてしまうということがありました。

家族からは「喋れるようになってほしい」、職員からは「本人の楽しみを増やしたい」というニーズがあり、ST リハビリを開始しました。

〈ST 評価〉

・ジェスチャーで伝えることができ、新たなジェスチャーを覚えることができる
・自発的に書けるのは名前程度で、文字の理解は曖昧だが、文字の模写が上手にできる
・ア・マ・パ行など、上手く出せている音がある

そこでリハビリの目標を『周囲とのコミュニケーションが少しでもスムーズに取れるように、伝える手段が拡大する』にして、次の取り組みを開始しました。

【ジェスチャー練習】
絵カードを見せてジェスチャーをしてもらい、分かりやすい動きを提案し一緒に練習する

【文字の練習】
名前や単語を書いてもらう、同じ文字同士を合わせる

【話す練習】
得意なア・マ・パ行を使った単語（ぱん、うま、いもなど）から開始、イラストと文字を提示して、口の形を見せ真似するように伝え、一緒に声に出して読み上げる

出来る喜びを得ていくこと、やりとりが楽しいと思えるような関わりを行い、少しずつ成功体験を積み重ねていきました。

今では自分から文字を書く練習をするようになり、スケジュール帳に職員と一緒に楽しみな予定を書き込み、それを他の利用者に見せに行くようになりました。コミュニケーションの手法が広がり、文字を活用することで本人の楽しみに繋がっています。

以前は表情が強張っていたり、イライラしていた様子がありましたが、取り組み後は穏やかな表情になったとの報告が聞かれました。



＊職員の声

リハビリを始めたことで、本人の自信に繋がり、伝わることの喜びを感じているようです。

■まとめ

障害の程度に関わらず、高齢化による身体機能の低下は誰にでも起こり得ます。職員の介助が過剰であれば自分で身体を動かすことが減り、更に身体機能低下に繋がります。

身体機能低下→職員の介助量増→意欲の低下→更なる身体機能低下といった悪循環から脱出するには、今その人が持っている身体機能を最大限生かした生活リハビリが必要です。

そのため、リハビリ委員会では評価、アセスメントと環境設定・支援方法の検討を事業所関係者と連携して取り組んでいます。また、今回のST 事例のような若い世代の利用者が、学校で学んできた社会に出るためのコミュニケーション能力を活かし、さらに伸ばしていけるような関わりをしていきたいと考えています。

・身体機能が低下して、今までのような活動や生活が出来ない
・ムセがひどい、喉に詰める心配がある、食事量が減っている
・様々な手法で、コミュニケーションをとりたい

このような利用者がいる場合は、ぜひリハビリ委員会にご相談ください。

理学療法士　矢吹 のぞみ
言語聴覚士　橋 絵里子

ゆたか福祉会 新役員紹介

2023年６月10日に行われた理事会において、木戸利秋監事と渡邉紘三理事が退任され、新たに４名の皆さんが新役員に選任されましたのでご紹介します。

監事



柏倉 秀克

この度、監事に就任しました柏倉秀克です。本務は桜花学園大学副学長（教授）で、専門は障害者福祉、特別支援教育です。学外では県障害者施策審議会専門部会長、県特別支援教育連携協議会会長、名古屋市福祉サービス苦情相談センター委員などを務めています。

微力ではございますが、監事としてゆたか福祉会の発展に力を尽くして参りたいと祈念しております。今後とも引き続き、ご指導ご厚情を賜りますようお願い申し上げます。

理事



時岡 新

名古屋市守山区にある金城学院大学で教員をしています。守山区に本部のある「NPO法人つくし」の理事（組織外）も担当しています。いま「ゆたか」で何よりめざしているのは（理事としての仕事は当然ですが、そのほかに）研究会の再開です。

まずは『50周年誌』の輪読会から始めて、現在のゆたかのありさまを知り、これから先のゆたかを考えていく。研究者としての私ができる最大限の貢献を、そこで果たすように努めます。



山﨑 利浩

小規模作業所の認可をめざした取り組みから、ゆたか福祉会に合流し、そこから21年が経ちました。これまでワークセンターフレンズ星崎の事業の整備と向き合ってきました。あわせて法人内の日中活動分野における諸課題の推進にもかかわってきました。

作業所を取り巻く環境が大きく変わるなかで、新たな挑戦や従来の方法の見直しが必要だと感じています。いろいろと学びながら力を尽くしたいと思います。よろしくお願いいたします。



岡山 加代子

これまでの職業人生の殆どを高齢事業に携わってきました。現在事業所では管理業務とケアマネジャー業務を中心に、法人の役割としては採用や研修部のメンバーとして活動しています。高齢になった仲間や障害者家族への直接的に支える機会も得て、個別の様々な課題に直面し、日々模索しています。

今後も他の理事さんたちと協力しながら、多様な意見を反映させ、ゆたか福祉会の理念に基づき理事としての役割を果たしていきたいと思います。

合わせて、後藤 強理事・法人本部長が副理事長に、宇川賢彦理事・法人本部事務長が専務理事になりましたことをお知らせ致します。

2023年度 第1回運営協議会開催



8月26日、今年度1回目となる運営協議会がゆたか作業所3階食堂で開催されました。

運営協議会は地域や利用者・家族の代表者等で構成され、年2回開催し、法人事業の報告とそれに対しての意見を伺う機会です。

1回目の今回は、2022年度法人事業報告と2023年度事業計画の報告が行われました。内容は、今年度取り組んでいる名古屋市緑区における将来構想の現状や、8月2日に開催した国際セミナー、消費税更正請求訴訟の状況報告、親の高齢期研究を本として発刊したことなどです。

その後の質疑応答では運営協議会らしく、事業計画だけでなく、身近に感じている不安や課題についての質疑が多くありました。利用者代表からは、先日亡くなった利用者の思い、言葉のない利用者の心に寄り添った支援、高齢になっても生きがいのある場所づくり、事業所の設備や休憩場所の課題、職員の人事異動の不安など、今、利用者自身が不安に思っていることや、身近な課題についての訴えがありました。

事業計画に対する家族・関係者からのご意見としては、統合される前の第2ゆたか希望の家利用者の名古屋への地域移行や、地域生活支援拠点事業所まーぶるの生活の充実などについて、また今後の事業展開や入所施設の定員空き問題、ベトナム人材交流など、これからの法人事業構想についての意見が多くありました。

今後も利用者・家族・関係者代表から、法人事業に対して直接ご意見を伺える貴重な場として開催していきます。

倉地 伸顕

本の紹介

「障害者家族の老いを生きる 支える」出版について



障害者家族の高齢化問題をテーマにした「障害者家族の老いを生きる 支える」が2023年8月末に刊行されました。

この本は佛教大学社会福祉学部教授田中智子先生、北星学園短期大学部教授藤原里佐先生、お二人の先生とゆたか福祉会の共著の本となります。

ゆたか福祉会第六期総合計画の検討の中で行った、障害者、家族、職員を対象とした家族の聞き取りや職員、利用者への実態調査を基に、現在の障害者家族の置かれている現状や実践の課題、今後の支援の在り方について書かれています。

ゆたか福祉会も事業開始54年を迎え、障害者の高齢化、重度化と併せて、障害者家族の高齢化問題が支援現場においても大きな課題となっています。

日本の障害者福祉制度は、障害者家族の介護に大きく依存する形で制度が組み立てられているため、家族の高齢化によって、介護負担の増大等、様々な問題が出てきています。

また障害者家族の問題は、障害当事者の問題の陰に隠れる形で、なかなか社会の中で顕在化しづらく、そのこともより一層問題を複雑にしています。

今回の本を通じて、障害者家族が抱える課題や、今後必要とされる支援や制度の在り方について考えるきっかけとなればと願っています。

今治 信一郎

8.30〜8.31

第46回きょうされん全国大会 in 埼玉 開催！

去る8月30日・31日、第46回きょうされん全国大会in埼玉が大宮ソニックシティーにて開催されました。昨年の岩手大会に引き続き、対面での全国大会になりました。暑い埼玉に全国から定員を上回る3，200名余の人々が参加し、ゆたか福祉会からも32名の職員・仲間が参加をしました。

「さけぼう命の尊さ いだこう人権の重み つなごう平和への願い」をテーマに、2日間に渡って開催された大会は、どの会場も笑顔と熱気に包まれていました。

1日目の特別企画では、国連・障害者権利委員会の総括所見を受け、日本の障害施策の実態と課題をシンポジウムで深めました。国連の伊東亜紀子さんによる特別講演とそれに続く鼎談で、障害のある人の人権保障について今後の展望が提起されました。

2日目は14の分科会企画が組まれ、現場での実践や政策面の課題、事業運営や地域・人づくりなど、多様なテーマについて真剣な議論が重ねられました。

私が参加した「暮らし」の分科会は、「障害のある人の一人暮らし」をテーマに開催されました。全国からの実践レポートを基に、障害のある人、家族、職員の個々の立場から、率直な意見交換が行われました。改めて共に同じ悩みや課題を共有しながら語り合う事の大事さを感じました。オンライン上では何度かやりとりをしていた方と久しぶりに対面でお会いする事もあり、会場内でも「久しぶり。元気だった?」の声があちこちから聞こえてきました。

新型コロナウイルス感染症は5類に移行しましたが、感染は依然拡大を続けており、健康や命への不安、現場の困難はこれまでと大きく変わることはありません。こうした状況下で大会の準備をしてきた埼玉の実行委員会については、大変な苦労があったと思います。このような努力のもと、今回の全国大会はきょうされんが大事にしてきた「共に繋がりあう」を文字通り実感できる素敵な大会となりました。

次回47回は滋賀県が開催地です。今から次回大会を楽しみに、まずは事業所内で今大会内容について共有していきたいと思います。

今治 信一郎

次回はみんなで

リサイクル港作業所　大橋 拓真

今回のきょうされん大会については、コロナ禍以前のように家族や利用者、職員で参加しようと計画しました。家族会は5名を予算化しましたが、申込が遅れ叶いませんでした。

家族会会長は「来年こそ滋賀大会に絶対参加するぞ!」と強い決意です。利用者2名は、作業所交流の場で説明できる方を推薦させていただき、職員は新入職員の私と副所長、4名で参加しました。

当日は全国から3，000人以上の利用者や職員、関係者が集まり、会場を埋め尽くす熱気に思わず圧倒されました。そんな中、話された基調報告の中で特に印象に残っている内容は大きく分けて三つです。

一つ目は、一般就労への移行が必要とされながらも福祉的就労の場の提供が不可欠であるということ。二つ目は世界全体と比べ、日本は父権的な支援を行っているということ。三つ目は国連障害者権利委員会による統括所見の翻訳が、いかに消極的であるかということです。

その中でも三つ目に挙げた統括所見に関わる内容の中で"障害者にとって福祉的就労の場も必要である"という話しが特に印象的でした。私は施設の中でこそ、利用者のディーセントワークが成立すると考えているため、一般雇用を無理に拡大するのではなく、国からの年金や支援費を増やし、賄っていくことが良いのでないかと感じています。

利用者は、「ウクライナが戦争で苦しんでいる。全国のなかまとの交流が楽しかった」と話してくれました。私は、こうした大会や研修に参加し、自分自身のステップアップに繋げていきたいと思います。



暮らしの中に彩りを

8/29 統合後 初の夏祭り

◆キラリンとーぷ◆

第２ゆたか希望の家とグループハウスなぐらの施設統合後、キラリンとーぷとして初めての夏祭りを８月29日に行いました。食堂と新しい建物の２会場で行い、自治会長のあいさつと太鼓で開幕しました。

各会場にゲームコーナーを設け、ハウスごとに会場を行き来してもらい、的当て、スイカ割り、風船釣り、モグラたたきゲームを楽しんで頂きました。アンパンマンや動物などの的をボールで倒したり、プールに入っているヨーヨー風船を釣竿で釣るなどのゲームを用意しました。的当てでは、なかなか当たらないため当たるまで何度も頑張っている利用者もいました。全員がゲームを楽しむのに午前だけでは時間が足らず、午後からもゲームの時間を設けました。ハウスでゲームの順番を待っている利用者には、盆踊りで使ううちわ作りをしてもらったり、ジュースやスイカが配られました。



ゲーム終了後は２会場に分かれて盆踊りをしました。自分で作ったうちわを持参して、ダンシングヒーロー、炭坑節、ジャンボリーミッキーの３曲を踊りました。職員も加わり各会場40名程の大きな輪になり、楽しそうに踊っていました。

昼食はお好み焼き、つくね串、焼きそば、唐揚げ、ケーキなど盛りだくさんの豪華な祭メニューで、皆さんとても喜んで召し上がっていました。

後藤 幸代

9/9 ~9/10 楽しかったキャンプ 譲り合って助け合って

◆ゆたか通勤寮◆

長いコロナ禍もあけて、通勤寮恒例の一泊行事としてキャンプの取り組みが行われました。

企画段階から実行委員の仲間たちを中心に話し合いを重ね、どのようなことを行っていくのかを決めていきました。ウォークラリー、飯盒炊さん、キャンプファイアーという流れが決まった後は、各グループに分かれて、メニューや出し物を決める話し合い、「買い出しに誰が行くのか」といった細かな内容を何度も何度も話し合いました。



当日は天気にも恵まれ、初日の食事を作る際には慣れない野外での調理に苦戦するグループがいると声を掛け合い、食事を分け合ったり、一緒にゲームや出し物を楽しみました。グループだけだった仲間の輪も、いつしか全体とのつながりへと広がっていきました。

２日目はみんなで温泉へ入ったり、昼食を食べたりと、全体で楽しむ企画を中心に取り組みました。

仲間ひとり一人の希望や思いはあっても、全員で譲り合ってみんなで楽しむことがキャンプを通してもたらされることを職員は知っています。いつかアパートやホームへと地域移行する仲間が力を発揮して、夢を現実へと近づけていくことが出来るように再確認する場所がキャンプであることは、通勤寮の大切な実践の一つです。

キャンプ担当職員一同



の目標をめざそう

～はじまった学びや取り組み～ その5

みのり共同作業所

資源回収・ウエス事業を通じたSDGsの取り組み





みのり共同作業所は開所当時から地域との結びつきが強く、月に一度、地域の住宅や小学校、中学校のダンボールやアルミ缶などの資源回収の取り組みを行っています。集合住宅などの一角にまとめて頂いたものを、利用者と力を合わせて運んでいます。「みのりさんが運んでくれるから助かるわ」と、地域の方から感謝のお声もかけて頂きます。

最近は、障害の重い利用者の方たちと一緒に、「みのりクリーン隊」として地域の八百屋さんや法人内事業所などのダンボール回収も行っています。

また、利用者の作業活動としてウエスの製造を行っています。ウエスは機械類の油や、汚れ・不純物を拭きとってきれいにするために用いる布のことです。近隣の元塩地域は機械類の製造や整備、塗装などの工場が多く立ち並ぶ地域です。

ウエスの材料となる布は、織物産地である愛知県一宮市などで仕入れる事が出来ます。材料となる布は、B反(注1)や消耗品のシーツ、古着等を使用しているので、廃棄しない資源の有効活用にもつながっています。

みのり共同作業所は開所して半世紀を迎えます。資源回収もウエス事業も昔から取り組んでいることですが、今後はSDGsの視点を持つことで、環境問題や地域活性化などに取り組みの幅を拡げていけると思っています。地域に必要とされる事業所であり続けるための大事な視点です。

荒川 元仁



古着を裁断し、ウエスとして再利用

(注1) 布にオリムラやソメムラ等があって商品にならない布

ベトナムの文化を知ろう！

VIETNAM

今月のベトナム豆知識

〈ベトナムのデザート〉 (Chè) チェー

チェーは、甘く煮た豆類や芋類、寒天やフルーツなど複数の具材をココナッツミルクと合わせたスイーツです。ココナッツの優しい甘さが魅力！

ベトナムでは、ドリアンの入ったものも人気。専門店では自分好みのチョイスもできます。日本でも、ベトナム料理店で食べられます！機会があれば、ぜひ食べてみてください。



「日中事業所合同職員研修」を開催しました！

就労支援事業推進委員会　山崎 利浩

2023年8月5日（土）の午後、法人内の日中事業所の職員を対象にして、合同研修会をオンラインで実施しました。この研修会には11事業所から合計103名の職員が参加しました。オンライン環境が普及したことで、このような規模の研修会も実施しやすくなりました。

ここ数年、新型コロナ感染症の感染拡大を防ぐために、事業所間の移動を制限してきたこともあり、一部の職員は「自分の配属先以外の現場を訪れたことがない」「よその現場が何をしているのか知らない」という状況が生まれていました。これまで法人内の日中事業所を束ねて研修を実施してこなかったこともあり、あらためてそれぞれの現場でおこなっている実践を共有する機会にしようとこの研修を企画しました。

今回はとくに作業に焦点をあてた内容で交流を行いました。この研修を出発点に今後も事業所間の連携を一層推進していきたいと思います。

研修の内容

1．こんな作業（活動）をしています　全11事業所の作業や活動内容を知ろう！

「他の事業所がどのような作業や活動をしているのか知らない」という職員は多いです。あたらしい発見や、お互いがつながるきっかけとして、事業所ごとに作業や活動内容を3分の動画にまとめて紹介しあいました。

2．実践報告

▼「パン現場の取り組み」
あかつき共同作業所

▼「ウエス現場の取り組み」
みのり共同作業所

▼「施設外就労の取り組み」
つゆはし作業所

▼「工賃の考え方と労働評価の取組みについて」
リサイクル港作業所

今回は4つの事業所から作業をテーマに、それぞれの実践を報告し交流しました。自主製品から受託作業、生活介護から就労継続支援と多彩な内容が持ちよられました。

3．作業改善ゼミ2022年度活動報告

▼作業改善ゼミのこれまでの活動
山崎

▼なるみ作業所の活動報告　安藤

▼リサイクルみなみ作業所の活動報告　前川

今年度で7期をむかえる作業改善ゼミについて、その取り組み経過や5S活動の意義などを共有しました。あわせて昨年度のゼミ生が活動成果の報告を行いました。

4．まとめ

最後に今回の研修を各現場で活かすという点で、就労支援事業推進委員会から3つの行動提起をしました。

①仕事を紹介したり共同で受注したり、現場間で呼びかけ合おう
②利用者も職員も事業所間の見学や実習をもっとやろう
③各職場で5S活動を推進しよう

参加職員の感想

・他の作業所がどんな作業をしているかにすごく興味があったので、今回の研修で知ることが出来てよかった。動画と説明があってわかりやすかった。
・それぞれの現場の奮闘を目の当たりにして、改めて自分も仲間たちが今よりもさらに働きやすくなるように現場づくりをがんばりたい。
・同じ軍手作業しているところが多いので交流をしたい。治具の工夫だとか、仕事をどこで見つけてきたのか知りたい。

ゆたか福祉会 保護者連合会研修会 開催

9月12日（火）10時から、昨年と同じ日本ガイシフォーラムレセプションホールを会場に、ゆたか福祉会保護者連合会研修会が開催されました。当日は「共に考える障がい者とその家族の高齢化」をテーマに、3本の職員報告と分散会を行いました。

職員報告の一つ目は、ゆたか福祉会の家族の高齢化についてまとめた「障害者家族の老いを生きる支える」が発刊された経過と本の紹介。

2つ目は今年の広報誌5月号で掲載した「住み慣れたホームと作業所に通い続けたい」という思いに応え、成年後見制度とも向き合った看取り支援報告。

3つ目は6月号で掲載したケアマネージャーでもある職員が、終末期の両親の命に向き合い、関係者と連携し旅立ちを支えた報告です。

報告後は9グループに分かれて分散会を開催。感想交流やお一人お一人が抱えている心配事や願いを率直に出して頂きました。どのグループも途切れないお話が続き、対面で、しっかり意見を伺うことの大切さを痛感した貴重な機会でした。

保護者連合会担当職員　萩原 千秋

参加した皆さんの感想

【保護者】

久しぶりの分散会でしたが、少人数制だったので発言する機会が多く良かったと思います。

成年後見制度のメリット・デメリットの件や、保護者会役員の交代について意見交換しました。どこの保護者会もほぼ同じような悩みを抱えていて、根本的な解消・解決はなかなか難しいと思いました。

他の作業所の保護者の方と話す機会がなかなか無いので、親睦を深められて良かったと思います。

ワークセンターフレンズ星崎
金田 珠栄

研修会に参加するまでは、「親が亡き後は、娘の世話は長女がしてくれるだろう」と安易に考えていました。しかしそのことが、長女にどれほどの負担をかけてしまうことになるのか、「長女の幸せに生きる生活を奪ってしまうことになってしまうかも…」と考えさせられました。

娘の老後について、長女も含め家族の中で話し合っていくことが大切だと思いました。相談員さんが「兄弟の方とも話し合いたい」と言って下さったのが心強かったです。

匿名希望

【職員】

一番の収穫は「ご家族様の思いを直に聞くことができた」ことです。文字だけでは伝わらない生の声を、そして多くの事業所で活動されるなかまのご家族の声を「もっと知りたい」、そう感じた研修会でした。

「一職員だから」ではなく、「ゆたか福祉会の一職員」として、僕にできること、やりたいことが見つかった気がします。これからも皆様の声、たくさんお聞かせ下さい。貴重な時間をありがとうございました。

つゆはし作業所　深田 郁斗

当日の参加者は保護者と職員等を合わせて約70名でした。今回の特徴は昼食を伴わない半日研修でしたが、短時間で分散会を開催したことです。2016年度以降7年ぶりのことです。

藤田会長はこうして顔を会わせる機会を「安否確認」と話されますが、最高齢の方は90才を超えたみのり共同作業所の親の方でした。しっかり話されるその姿に力をもらい、懐かしい顔と出会い、話がはずむ保護者や職員の姿に、ゆたかの原点を垣間見るような思いがしました。

保護者連合会担当　向 幸子



大学生協 夏の協働 インターンシップ

～「我々のしごと」を伝えること・若い世代への期待を込めて～



インターンシップとは、学生が興味のある企業などで実際に働いたり、訪問したりする職業体験のことです。実際の業務や働く環境の体験を通じて、業務内容や働くことの理解を深めることを目的としています。

インターンシップは、学生側だけでなく、受け入れ側にもメリットがあります。ゆたか福祉会においても、人材確保に結び付ける意味合いも込めて、働く職員の「入職の〝きっかけ〟」や「何故、ゆたか福祉会を選んだのか」、「仕事の魅力」等を通して、終日、事業紹介やディスカッションを行いました。

ゆたか福祉会の〝今〟を語るには、積み上げてきたこれまでに触れないわけにはいきません。その歴史は、多くの団体や事業との「協同」の実践ですが、説明するスタッフにとっても改めて確信する機会となりました。

平和の取り組みやSDGs活動の展開等の紹介後、リサイクル港作業所からは、自治会役員の仲間が登場し、自分たちの言葉で、働く仲間たちの様子や、地域を支えるリサイクル事業を誇らしげに語りました。

また最近、関心の高い「相談支援事業」について、相談支援事業が必要とされてきた歴史に触れながら、今年度取り組んでいる「地域づくりと防災活動」について報告しました。

休憩時間に、仲間たちと職員が談笑する姿を見ていた参加者からは「雰囲気に温かみを感じた」との感想が聞かれました。多くの学生さんに、温かみのある〝福祉職〟を志していただきたいです。

ゆたか相談支援事業所どうとく　丸山 京子

命を守る 7/15

みらいろ&リサイクル港作業所「合同」防災の取り組み

～救急救命講習開催！～



みらいろとリサイクル港作業所では、これまでにも施設別研修として合同で防災の取り組みを行ってきました。2年前には地域の消防団においでいただき、AED研修も取り組みました。今回は普及員の資格を取得した職員が講師となって行った「救命救急講習」について報告します。

救命活動の中で最も重要な事は胸骨圧迫です。私が参加した救命救急研修の中でも、繰り返し練習が行われました。胸骨圧迫のタイミングは、「もしもし亀よー♪」のリズムである事を伝えると、若手職員が張り切って取り組まれていました。

印象的だったのは、ベテラン職員が若手職員に寄り添い、胸骨圧迫のタイミングを伝えてフォローし盛り上げている姿です。事業所のチームワークの良さを感じ、楽しみながら学ぶ事ができました。

救急車が到着してからの救命行為では「社会復帰率が約25％」と低く、1秒でも早く救命に携われるかどうかが勝負です。今回の研修の中でも「実際に体験すると焦って手順が分からなくなる」などの声が職員からありました。それには訓練を重ね、正しい手順を身に付ける事が必要です。研修後のアンケートでは、多くの方から定期的な開催を望む声がありました。

次回はワークショップ形式で、より実践に近い体験型の講習内容を検討し、年1回は施設別研修に取り入れたいと思います。

みらいろ　熊川 暁光



一般寄附（8月）

株式会社 大谷商会

順不同敬称略

賛助会員新規加入者・更新者ご芳名一覧

（7月11日～9月8日 手続き分） 順不同敬称略

高橋 正教
脇田 武子
脇田 厚子
前田 勝彦
井出 信男
野田 茂明
鏡味千代子

早川 剛史
数納 幸子
藤田 秋雄
藤田 明美
梶田まゆみ
加藤 信子
杉浦登志子

橋本 由美
伊藤 順子
岩本 榮子
阪田 正子
新城 紘行

日鉄物産株式会社 らいぶ 施設長
東海ニチユ㈱
有限会社 岩本工務店

日誌 8月

- 2日（水） 国際セミナー
- 5日（土） 共同墓地「盆供養祭」・管理委員会
- 16日（水） 事業運営推進会議
- 17日（木） 広報・ホームページ編集委員会
- 23日（水） 所長会議
- 24日（木） 非営利・協同組合 夏季インターンシップ
- 25日（金） 新管理職合同研修 権利擁護・虐待防止会議
- 26日（土） 理事会・運営協議会
- 28日（月） 研修部会議
- 30日（水） きょうされん第46回全国大会 in埼玉（～31日）

表紙の作者紹介

ワークセンターフレンズ星崎「花火」



写真左上から
山田むつ美さん、深谷聡さん、森部愛未さん
久野ひとみさん、菊地昭子さん

スマイル班では、月に一度アート活動に取り組んでいます。主に季節やイベントをテーマにして、これまでにも様々な作品を制作してきました。

今回は日本の夏の風物詩、夜空に舞う花火をテーマにした作品を制作しました。ストローの先を広げて、そこに絵の具を付けて、黒い画用紙の上にスタンプのように色をつけていきます。筆を使うのが苦手な仲間も、スタンプなら上手にできます。

制作途中では上手にできるのか不安げな仲間もいましたが、明るい色をたくさん使い、色が重なることで花火の雰囲気が出てくると「綺麗に出来た！本物の花火みたい」と誇らしげな表情に変わっていきました。

本物の花火のように「たくさんの人に観てもらいたい」要望から、広報の表紙に応募しました。

広報・489号

2023年10月号（2023年10月10日発行）
定価1部100円
法人協力会員・賛助会員は会費の中に購読料を含みます

発行・編集 ／ 社会福祉法人ゆたか福祉会
印　　刷 ／ 株式会社東海共同印刷

法人協力会費・賛助会費・寄附金など福祉会への申し込み、ご送金は

法人協力会費 ＝ 年間1口6,000円、
賛助会員（個人1口3,000円、企業団体等1口5,000円）

●銀行口座 名義はいずれも社会福祉法人ゆたか福祉会

・三菱UFJ銀行	柴田支店	普通預金 291-884
・中京銀行	鳴海支店	普通預金 150-425

●郵便振替口座 00820-8-54026 社会福祉法人ゆたか福祉会

お詫びと訂正

広報９月号掲載の内容に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。
P7　暮らしの中に彩りを「アロマフラワーボックス作り」 講師のお名前　誤：橋本様　正：松本様

その人らしく 働く 暮らす Vol.113

仲間

「きた！きた！おかぁさん！」

ゆたか生活支援事業所みどり　**森下 昇さん**



森下さん、1964年3月30日生まれの59歳の仲間です。来年の3月には、60歳になり還暦を迎えられます。

事業所みどりのグループホームへは、2009年に入所されました。入所するまでの経緯としては、2009年に大清水ホームが開所になり、お母様も高齢になってきている中で「入所を決断した」と伺っています。

家庭帰省については、ご本人の加齢に伴う体力低下、及び親御さんのご自宅での対応が徐々に難しくなっている現状を踏まえ、毎週末としていました。しかしこの間、毎週末から大型連休のみへ変更。さらに長期帰省ではなく、お盆や年末年始の1泊のみの家庭帰省へと変更してきました。

徐々に家に帰る機会が減り、大好きなお母様にお会いする機会が少なくなる中で、週末になると、「おかぁさん…」と目に涙を浮かべる姿が多く見受けられるようになりました。

このような中で、お母様にホームへ来所して頂くという取り組みをしています。ホームへお越しいただいての大切な時間です。お母様の姿が見えると「きた！きた！おかぁさん！」と、とても素敵な笑顔をされる森下さんです。

清水 亮如



大好きなお母さんと

職員

「相談支援の現場にて ー改めて考え直した支援のあり方ー」

ゆたか希望の家相談支援事業所　**石川 拓眞**



2014年に入職し、日中事業所で8年間勤め、昨年の4月から相談支援事業所に移り、相談支援専門員として働いています。

日中事業所では、"働く"とはどんなこと？"という出発点から、仲間の皆さんが仕事に取り組む事の支援に取り組んできました。

相談支援での業務は、利用者様の暮らしを色々な場面や側面から捉えながら、必要な福祉サービスにお繋ぎすること、またサービス内容を見直していくこともあります。

その他にも、書類の提出代行や、他の手段では支えられない所について、相談員が直接支援に伺う事もあります。文章にすると、どうもあっさりになりますが、実際の業務内容はとても複雑多様です。

主な業務は計画の作成とモニタリングになりますが、書類作成が目的なのではなく「どうやって計画を作るか」が大切なのだと思います。その為の技術を磨いていくためにも、今後も学び続ける事が必要だと感じています。

また、相談員が直接支援して解決できることは限られていますし、例え私がどんなに頑張っても、やれる範囲の限界はすぐに来てしまいます。

利用者様の生活を支えるためには、利用者様ご自身やご家族、普段の生活を支えてくださる支援者の方々の力をたくさんお借りしていくことが大切だと思っています。

最後になりますが、相談の仕事特有の大変さは確かにありますが、嬉しい事や楽しい事も勿論あります。これからも相談支援を通して、皆様の暮らしを支える一助となれれば幸いです。



電話対応中